

タイトル	駅がつなぐ風景
提案者 (所属・代表者)	阿部佑哉、小野晃次郎、平野文康、山本駿 (工学院大学工学部建築都市デザイン学科)
整理番号	30
賞	佳作

【注意事項】

本資料は、平成 24 年に杉並区が開催した「これからの荻窪駅周辺まちづくりを考えるアイデアコンペ（以下、アイデアコンペ）」において応募者から提案された一作品です。今後の荻窪におけるまちづくりの方向性を決定するものではありません。

アイデアコンペの詳細については、以下のページをご覧ください。

<https://www.city.suginami.tokyo.jp/s094/6497.html>



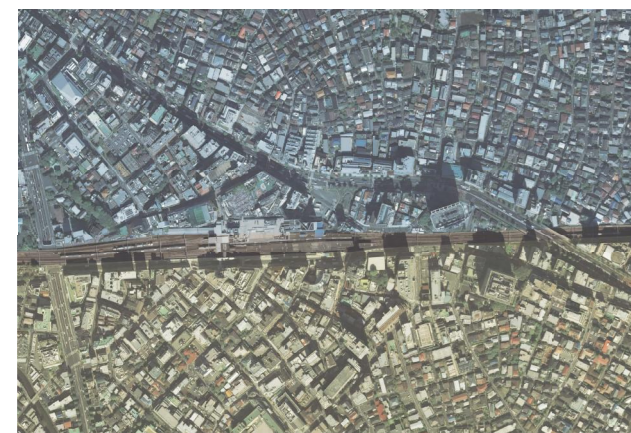
駅がたぐ風景

■線路の作る2つの風景



独特のスケールを持つ線路沿いの狭いまち。中央線の開通とともに発展を続けてきたまちであり、現在も丸の内線や東西線などの乗換駅として多くの人々に利用されているが、複々線や地上GLを走る列車などの影響でローカルな駅舎の雰囲気と、現代的スケールが混在した駅前風景を作り出している。

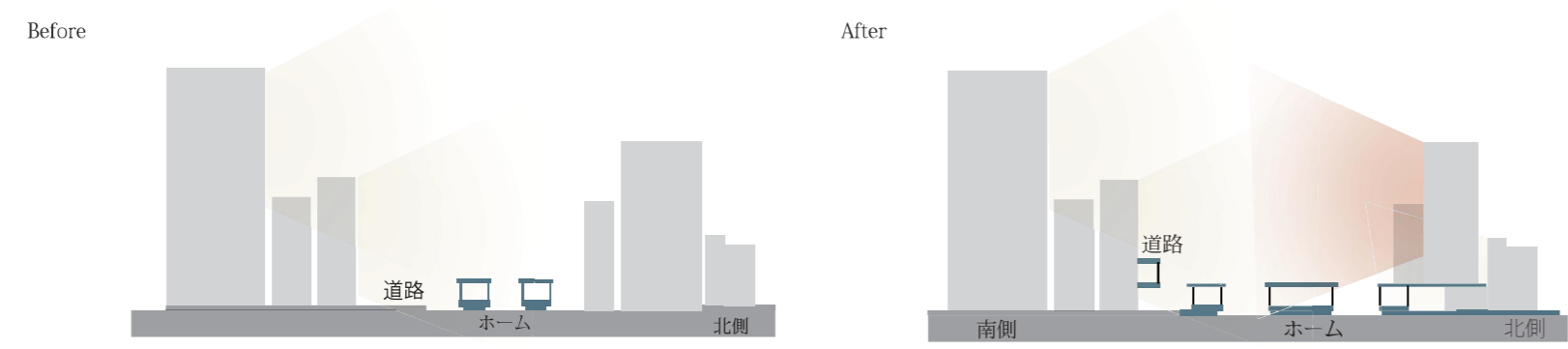
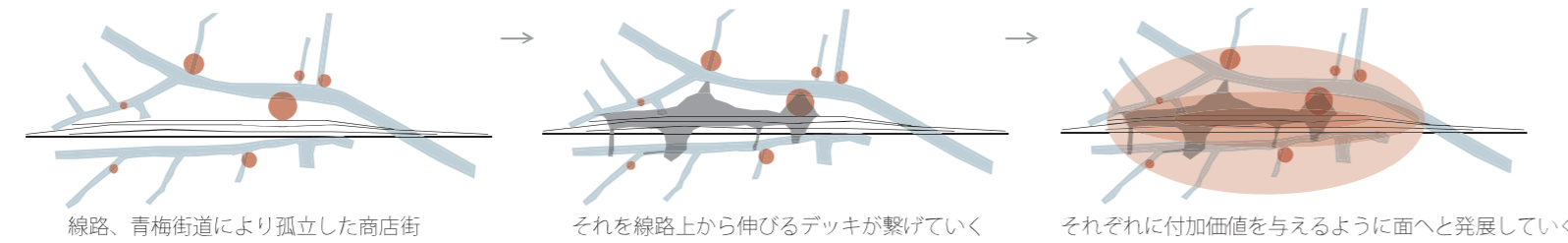
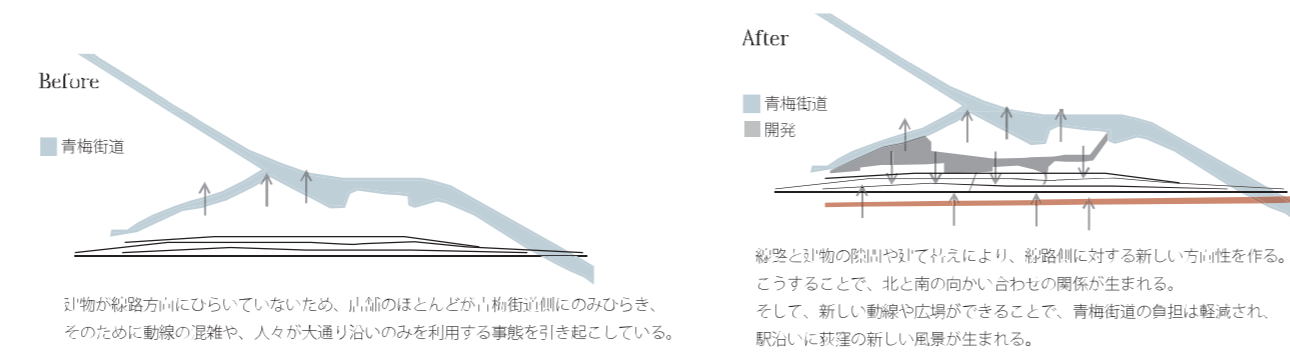
■南北に特徴を分つ線路



敷地周辺は線路により北と南が分断され、それにより剪野田や商業施設に違いのあるまち並みを作り出している。その2つの特徴の延長線上としての線路が、緩やかに北と南を繋いでいくことで、それぞれの良さを残しながら、一つのまちとしての一体感を持つ、新しい駅前の風景を作り出す。

■わかつものから繋ぐものへ

鉄道の地平線にある線路の風景を活かす。まちの点と点を繋いでいくように駅を作っていく。その駅はビルや、111の場所としてだけそこにあってはならず、本来まちの「はじまりの場所」として、人々の生活がまちに広がっていく玄関としてそこにあべきなのではと考える。そうやって、線路沿いの風景一つ一つに目を向けながら開発していくことで、互いに付加価値を与えながら発展し、人々がまちと駅という場所を一体のものとして体感するとともに、アクティビティが距離を超えて広がっていくようなまちを作る。



都市の中に駅という施設があるのだが、そこは南北の人の動線を通るものになってしまっている。

都市と駅との境界線をはっきり分けたいように、ホームが駅というより住街の延長線となるようにする。

